

小笠原諸島の世界自然遺産登録に思う

環境委員会 専門員

やました たかひさ
山下 孝久

平成 23 年 6 月、小笠原諸島(東京都)がユネスコの世界自然遺産に登録された。平成 5 年の屋久島(鹿児島県)、白神山地(青森、秋田県)、平成 17 年の知床(北海道)に次いで 4 か所目である。小笠原諸島は、大陸と一度も陸続きにならなかったことがない海洋島であり、小笠原固有の動植物が数多く生息している。その独特の生態系が高く評価された。

いくつかの課題もある。その一つが外来種への取組である。小笠原の固有種の多くは、外敵のいない環境の中で進化してきたため、外来種の侵入には極めてもろい。食用として持ち込まれたノヤギは植生破壊や裸地化を引き起こし、北米原産のトカゲ「グリーンアノール」は天然記念物のチョウ「オガサワラシジミ」を絶滅の危機に追い込んだ。薪炭用として持ち込まれた常緑樹のアカギは侵略性が特に強く、樹高 20m 以上にも達する。小笠原では、外来種の駆除と固有種の保護への地道な取組が行われているが、人や物が動けば外来種も増えるだけに、気を緩めず後手ではない先回りした対策が欠かせない。

ユニークな取組がある。平成 17 年の春、NPO 法人小笠原自然文化研究所が母島の海鳥繁殖地を調査中に海鳥カツオドリの無惨な姿に出くわした。いったい誰に襲われたのか。約 2 か月後、センサーカメラに海鳥をくわえたネコが撮影された。この衝撃的な事態に、同研究所が東京都獣医師会に安楽死の方法を相談したところ、思いがけず「鳥も救って、ネコも救おう」との提案を受ける。もともとノネコは、ペットやネズミ退治用とされたものが野生化したのであり、アカガシラカラスバトの繁殖をも脅かす。こうしてノネコの捕獲、東京への搬送、動物病院での受入れが始まった。これまで 200 頭以上が捕獲された。その多くが東京に搬送され、東京都獣医師会の協力の下で飼いネコとしての順化が行われ、新たな飼い主に引き取られている。これは小笠原諸島と 1,000 km 離れた大都会東京の間で、多くの人々の協働による、世界でも例を見ない取組といえる。小笠原では飼い主のいないネコを島からなくす努力が続けられ、生態系とペットと人々の暮らしの共存を目指している。海を渡ったネコたちが小笠原の観光大使となってくれる期待も膨らむ。

また、自然環境の保全と観光振興との両立をいかに図るかである。その対応の一助となるのがエコツーリズムであり、これは旅行者がガイドの案内で自然観光資源と触れ合う活動である。父島の南西約 1 km に浮かぶ無人島の南島はサンゴ礁でできた世界でも珍しい沈水カルスト地形が特徴であり、岩が門の形にえぐられて海とつながる扇池では、1 日最大 100 人(1 回 15 人)、滞在は 2 時間、東京都自然ガイド同行によるエコツーリズムが実施されている。観光客は体験を通じて自然環境や生態系を見る目が深められる。豊かな自然に一定の対価を支払う取組を実践することにより、自然保護の意識が醸成され、環境の保全と地域の振興が相俟いながら進むのではないか。エコツーリズムの多彩なメニューの提供を望みたい。特に、未来を担う今の子どもたちに、世界自然遺産への体験交流事業を行ってみたい。どうだろうか。